

2 昭和52年度沖縄周辺重要水産資源調査

喜屋武 俊彦、他2名

1 目的

沖縄周辺海域で網漁業・1本釣漁業の対象となる主要魚種について資源調査を恒久的に実施し、それぞれの資源の生態、資源の変動法則を明らかにして、沿岸近海漁業の管理および合理的生産体系の確立をはかる。

2 調査の概要

1) 個体生態調査

漁獲物を通じて成長と年齢、成熟、産卵、系統群、回遊等について知見を得る。

- a) 体長測定調査
- b) 体長、体重調査
- c) 胃内容物、生殖腺調査

2) 漁獲量調査

- a) 水揚地調査
- b) 標本船調査

3) 標識放流調査

3 調査結果

カツオ竿釣

昭和52年度の本部の近海カツオ竿釣漁獲量は464,700.5kgで前年の156%で増加したが年傾向は減少傾向である。漁期は4月から12月、盛漁期は5月であった。宮古島の近海カツオ竿釣漁獲量は15隻出漁し、865,437kgで前年の244%で大巾に増加したが、年傾向は本部同様減少傾向にある。漁期は5月から10月まで、盛漁期は7月であった。標本船調査より宮古島近海のカツオの魚体は中、小判主体で、漁場は漁期前半は島回りで、後半は尖閣列島近海であった。

宮古島のカツオ餌料魚は標本船によると、タカサゴ主体で12,620kgの採捕で前年の317%で大巾に増加した。

南方基地のカツオ竿釣は1月～12月まで52隻出漁し、30,199.5トンの水揚で前年比74%であった。基地別水揚量は、ソロモン、10,237.7トン、パラオ1,311.7トン、ラバウル8,960.3トン、キャピアン9,704.9トンであった。

ひき縄、糸満

糸満漁協に水揚されたひき縄の総漁獲量は42,177.6kgで前年の168%で増加したが、カツオ類は前年の74%で逆に減少した。サワラ類、シイラが大巾に増加した。盛漁期はカツ

オ類、マグロ類は11月、サワラは6月、シイラは5月で、総漁獲量に占める各漁種の割合は、カツオ類4%、マグロ類20%、サワラ類47%、シイラ8%、その他21%となった。
タカサゴ追込網、県漁連

県漁連の追込網ののべ水揚隻数は前年より減少、有漁日数は前年同様、水揚量はペラ類、ニザダイ類を除くと、総水揚量とも前年より増加した。特にアジ類が大巾に増加した。タカサゴ類は総水揚量の8.7%を占め、530トンの水揚量で前年の1.04%、平年の1.44%であった。なお、標本船は前年の55%の水揚量で減少した。

トビウオ類、県漁連、糸満

糸満漁協に水揚されたトビウオ類は8.8トンで前年の371%で大巾に増加し、盛漁期は6月であった。県漁連に水揚されたトビウオ類は43.7トンで前年の189%で糸満同様大巾に増加した。盛漁期は6月であった。両市場に水揚されたトビウオ類はオオメナツトビ、アヤトビウオ、トビウオ、マトウトビウオ、チャバネトビウオ、ヒメアカトビ、オオアカトビ等であった。

3.市場における主要魚種水揚量

沖縄県漁連、那覇地区漁協、糸満漁協に水揚されたハマダイ、ハマフエフキ、スジハタ類、アオリイカの4魚種について水揚量を調査した。県漁連のハマダイは、211トンの水揚量で前年比132%、ハマフエフキは34トンで前年比102%、スジハタ類は76トンで前年比88%、アオリイカは56トンで前年比74.1%であった。那覇地区漁協のハマダイは145トンで前年比149%、ハマフエフキは3トンで前年の16.6%、スジハタ類は10トンで前年の30%、アオリイカは2トンで前年の18.6%であった。糸満漁協に水揚されたハマダイは14トンで前年の220.8%、ハマフエフキは17トンで前年の82.5%、スジハタ類は11トンで前年の51.7%、アオリイカは6.5トンで前年比148.8%であった。

なお、調査結果の詳細は“昭和52年度沖縄周辺重要水産資源調査結果報告書”として別冊で行なう。